

藤島宗韶詠草紙背文書 繙読

——色紙奉行関連資料及び俳諧歌仙一卷——

一 色紙奉行について

京都女子大学所蔵蘆庵文庫追加資料の中に、「参集酒肴之事」と題された折紙一紙の書付けが残されている（図版1）。筆蹟は藤島宗順。一部破損箇所裏打が施されており、その際に糊付けが為されてしまい現在は折紙を開くことができない。その状態で、縦一六・六糎、横四五・八糎、通常の楮紙に記された一枚の覚書きであるが、今は、先々代の新日吉神宮宮司、藤島益雄氏の手で「参集酒肴の事」と表書きされた、比較的新しい包紙に包まれている。何百枚と伝わる藤島家歴代筆の折紙資料の中にあつて、おそらく藤島益雄氏も当資料に特別の関心を持たれ

藤	大	加	山	大
原	山	藤	中	谷
静	和	弓	延	俊
香	哉	枝	之	太

たが故に、包紙に包むという特別扱いをされたと思われる。その全体を翻刻すれば、左の通りである。（改行箇所は／で示した）

参集酒肴之事

- 一、御会奉行衆／御会始 御当座始 御法楽
- 一、御献奉行衆／無取替御茶口切申沙汰／御茶壺下山出行
／其外参集進献／大福茶分配
- 一、御色紙奉行衆／御色紙触出
- 一、小番奉行衆／小番惣勘定始終二度／其外参集
- 一、修理職奉行衆／御煤御取置／其外参集
- 一、御殿奉行衆／御煤御取置
- 一、御能奉行衆／始り当日
- 一、北面奉行衆／御煤 御取置
- 一、諸奉行衆／御文庫入替
- 一、上北面蔵人非蔵人／立楽催／御鎮守御掃除卅日斗／小番結改／御煤御取置
- 一、下北面／御取置

（『参集酒肴之事』目録通番一五三九、整理番号A10）

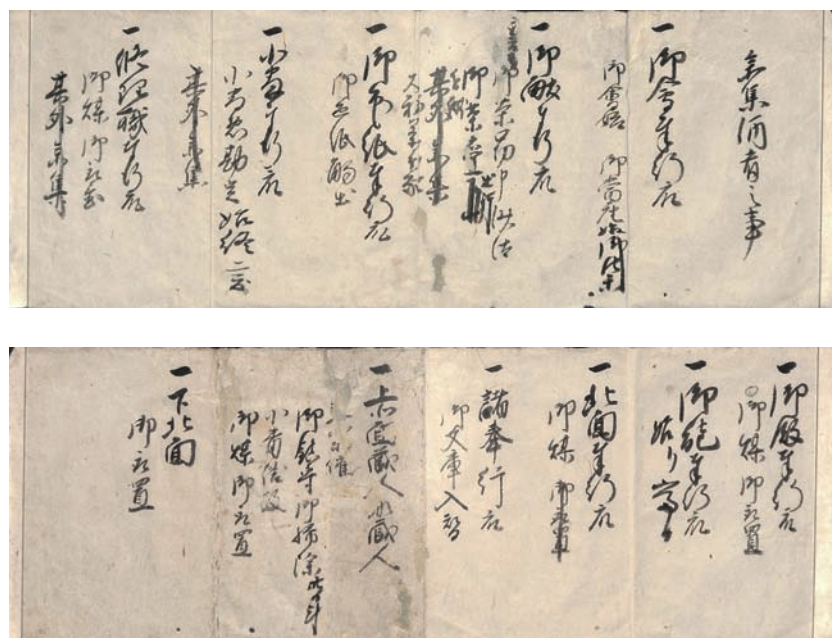


図1 参集酒肴之事

藤島家は新日吉社の神官であるとともに、代々宮中もしくは院中の非蔵人として出仕しており、藤島宗順も例外ではない。当資料も非蔵人の業務に関する覚書きと考えられる。端作りの「参集酒肴」とは、宮中・院中に人々が参集した際に準備する酒と肴のことであろう。宮中に於けるさまざまな行事・業務の準備・進行・片付けなど、それぞれの行事ごとに運営を任せられる奉行のもとで、実務を行うのが非蔵人の役目である。「参集」というのが、行事に参加する堂上人たち全員が集まる時を指すのか、奉行役の堂上人たちが集まる場合を言うのか不明であるが、その折の料理を提供するのが非蔵人の仕事であると思われる。例えば、最初の「御会奉行衆」のもとで行われる行事の場合、和歌御会始と当座和歌御会と御法楽和歌御会のおそらくは終了後の宴に「酒肴」を用意する必要があることの覚えであろう。二番目の「御献奉行

衆」の場合は、お茶の口切りに関しての諸行事の際に、六番目の「御能奉行衆」は禁中での能の催しの第一目に提供するとの記事である。

その諸奉行の中に「御色紙奉行衆」なる名が見える。色紙奉行とはどのような役目なのか。「御色紙触出」の時に「酒肴」を供するところがあるようだが、「御色紙触出」とは何をすることなのか。

幸いなことに、その色紙奉行の業務に関わる具体的な資料が、蘆庵文庫の中に、紙背文書として残されていた。本誌前号に於いて翻刻・紹介を行った、藤島宗順の父、藤島宗韶（忠韶）の宝暦六・七年（一七五六・一七五七）の和歌詠草書留（『藤島宗韶詠草』一五九九 大四三―一）の紙背文書がそれである。その書誌を再掲すれば以下の通り。

〔整理書名〕『藤島宗韶詠草』〔著者〕藤島宗韶詠（自筆）〔整理番号〕大四三―一〔目録通番〕一五九九〔外題〕打付書「宝暦六丙子年／同七丁丑年／愚葉／忠韶／宗韶」〔内題〕なし〔成立〕宝暦六～七年写〔装訂・数量〕共紙表紙横本仮綴一冊〔寸法〕一五・二×二一・三糎〔丁数〕全三六丁・貼紙二丁〔料紙〕楮紙（反古）本文共紙表紙一枚を含め、料紙計三十八枚の紙背を調査したところ、白紙五枚、和歌詠草の下書き（歌題のみを記したものも含む）九枚、書状（書き止し一枚を含む）七枚、触状の上半分もしくは下半分十五枚、俳諧歌仙書留二枚という内訳であった。書状七枚のうち五枚、および触状十五枚が色紙奉行関連の書類である。以下にその資料を翻字し、考察を加える。

先ず、関連書状五通に、私に（A）から（E）の記号を振り、翻字し、後の☆に差出人・宛名についての注記を加えた。

（A）

口状

先日被 仰下候／御料紙書付候間／致献上候。宜預／御沙汰候也。／二月十七日 隆叙／御色紙奉行／御衆中

（二丁紙背、図版2）

☆四条隆叙、享保十五年（一七三〇）生まれ、宝暦六年は従三位右中将、二十七歳。

（B）

被 仰付御色紙／書付 献上仕候。宜／預御披露候也。／二月十七日 敬季／御色紙奉行中

（二丁紙背、図版3）

☆高丘敬季、享保六年（一七二二）生まれ、宝暦六年は従三位左中将、三十六歳。

（C）

六百番哥合御書写物／書損相改令献上候。宜／頼入存候也。／二月十九日 規長／植松前宰相殿／久世少将殿

（四丁紙背、図版4）

☆甘露寺規長、正徳三年（一七一三）生まれ、宝暦六年は従二位、辞権大納言、四十四歳。

（D）

六百番哥合／御書改候ハ、只今／可被献候。各御献上／相待居候也。／二月十九日 栄通／賞雅／風早三位殿

（二七丁紙背、図版5）

☆風早公雄が三位は、宝暦五年一月二十日から明和七年（一七七〇）まで。

久世栄通が少将は、延享二年三月から宝暦六年五月十日まで。

植松賞雅よしとしが前宰相は、宝暦四年五月十六日以降。

(E)

六百番哥合／御哥書御校合／候処之被印付之分／御尋之趣恐入候。／龜忽之至存候。／改候而可致献上候／間、
宜御沙汰頼存候。／尤明日迄に可献候也。／二月十九日 公雄／植松前宰相殿／久世少将殿

(三七丁紙背、図版6)

☆風早公雄、享保六年（一七二二）生まれ、宝暦六年は従三位左中将、三十六歳。

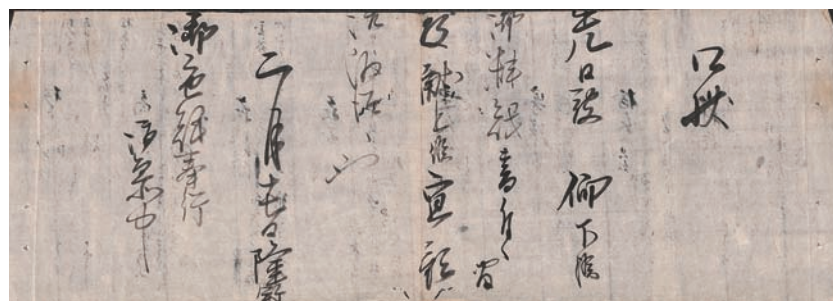


図2 書状 (A)



図3 書状 (B)

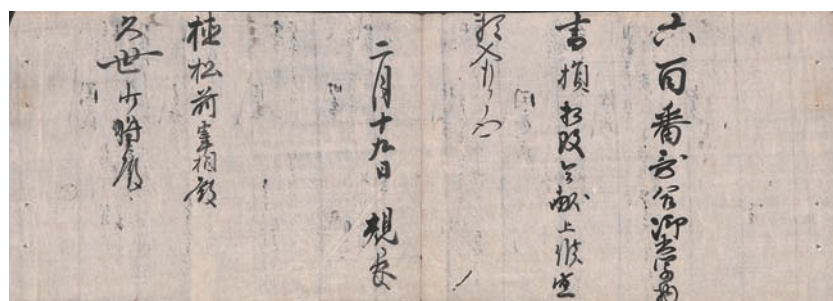


図4 書状 (C)

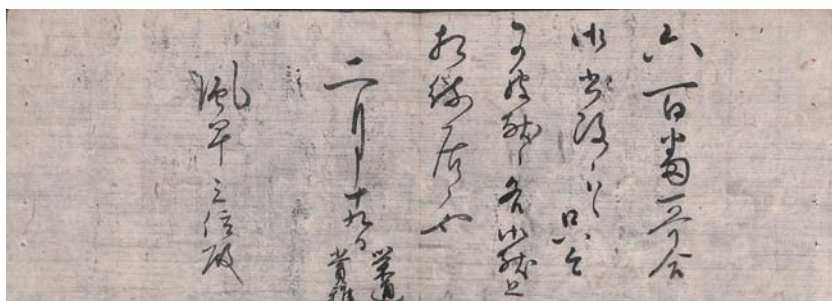


図5 書状 (D)

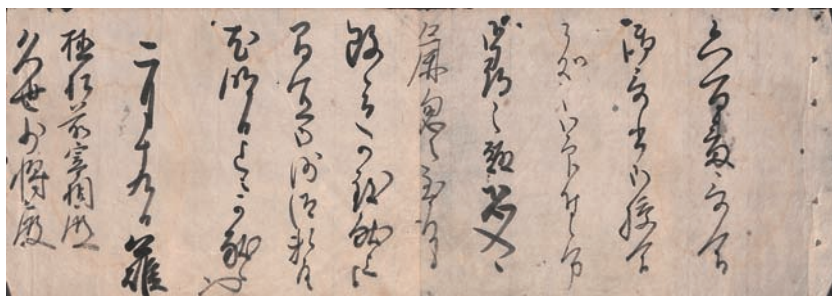


図6 書状 (E)

以上、(C) (D) (E) に見える風早公雄・久世少将栄通・植松前宰相賞雅の官職名から、これらの書状が同時期のものとすれば、宝暦五年二月か同六年二月にやりとりされた書状ということになる。宝暦六年・七年の詠草留の紙背であることから宝暦五年二月の可能性が高いと考えられるが、表面の詠草留がいつ現状のようにまとめられたかは確定しておらず、宝暦六年二月もあり得る。

次に、色紙奉行が出した触状について紹介する。本来縦紙の触状が横に切断され、横本袋綴の料紙として十五枚が使用されている。そのうち、触状の下半分に当たる文書は七枚で、そのうち三枚は各々の上半分が左掲の (a) (b) (h) の下半分であることが文字の配置から確認できる。他は上

半分との組み合わせを特定し難いが、下半分の記事の内容は何れも同じであるので、これ以上組合せを特定する必要はない。以下に触状の上半分にあたる資料に (a) から (h) の符合を振り、(a) と (h) については下半分と合せて本来の形に組み合わせ翻字した。

(a) 徳大寺大納言殿宛 春上 (一〇丁紙背・一五丁紙背、図版7)

以下、宛先と「六百番歌合」の巻名が異なる触状が六通、計七通分確認できる。

(b) 甘露寺前大納言殿宛 春下 (二六丁紙背・二〇丁紙背、本文冒頭「来十八日」)

(c) 冷泉民部卿殿宛 秋上 (二九丁紙背)

(d) 山本宰相殿宛 冬 (一五丁紙背)

(e) 四辻宰相中将殿宛 恋一 (三三丁紙背)

(f) 石井三位殿宛 恋二 (七丁紙背)

(g) 山井大藏卿殿 恋三 (二五丁紙背)

また、書写する書目が「百人一首」、配られる料紙等が「御料紙 式括／堺 一枚」となるものが一通ある。

(h) 八條前中納言殿宛 百人一首 (三一丁紙背・三二丁紙背、図版8)

以上のうち、(b) のみ本文冒頭の「来月十八日」の「月」が記されず「来十八日」となっており、筆蹟も異なる(図版9)。他は(a)と同文で筆蹟も同筆と見なされる。何れも宗韶筆ではないように思われる。^注

宛先の公卿について、宝暦五年頃として比定し、各役職の在任期間を確認すれば、以下の通りである。

(a) 徳大寺公城きんむら 宝暦四年一月二十六日権大納言、宝暦八年七月二十四日止権大納言。

(b) 甘露寺規長 宝暦四年四月二十九日辞権大納言。

来月十八日迄可被献候也。		德大寺大納言殿	
		校合了	
		春上	
		六百番歌合	
		御料紙	御写本
		三括	一冊
		一枚	

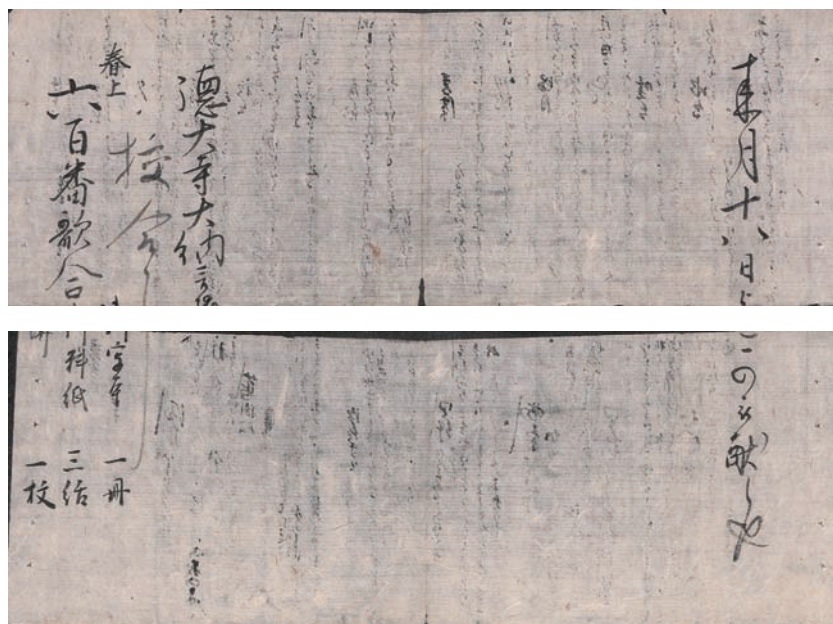


図7 触状 (a)

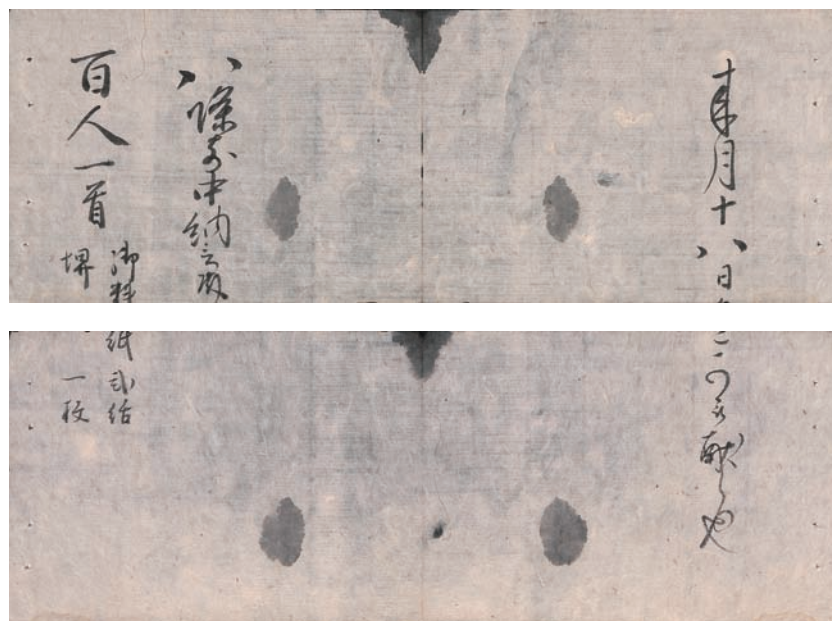
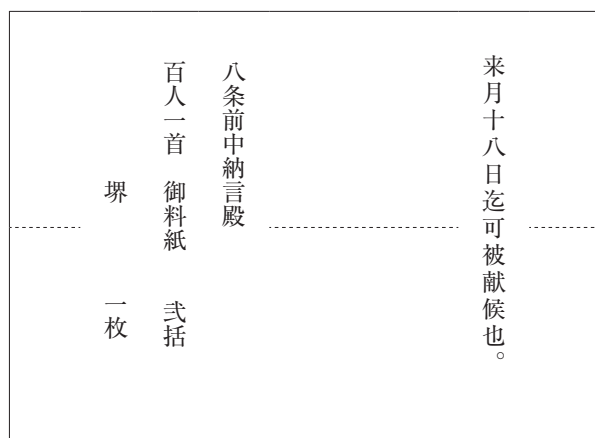


図8 触状 (h)

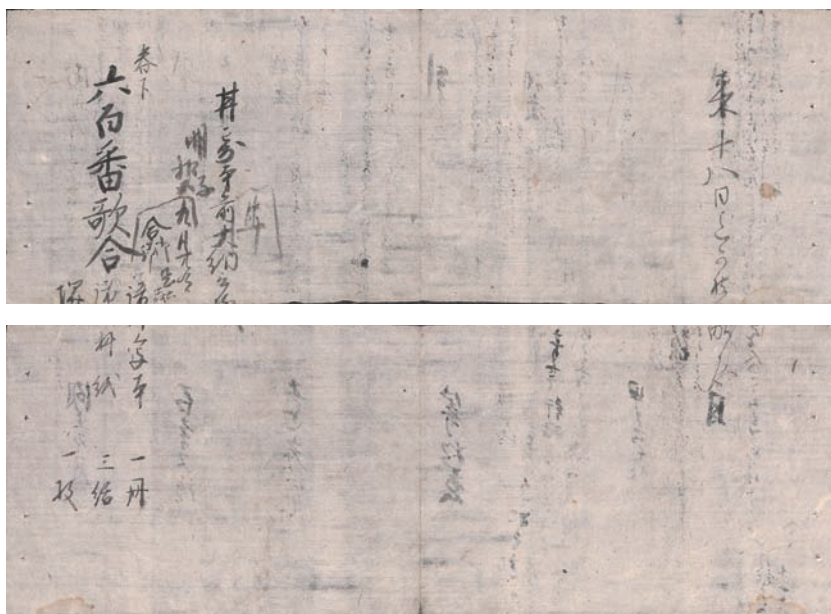


図9 触状 (b)

- (c) 下冷泉宗家 延享四年十二月二十六日民部卿、宝暦七年十一月十二日権大納言。
- (d) 山本実観^{さねみ} 宝暦四年十一月二十四日参議、宝暦八年九月二十九日辞参議。
- (e) 四辻公亨^{きんあき} 宝暦四年十月二十六日参議(中将如元)、宝暦九年十一月六日権大納言。
- (f) 石井行忠 寛延元年十二月二十六日従三位、明和三年十二月十九日従二位。
- (g) 山井氏栄 寛延四年一月二十六日大藏卿、明和四年三月二十七日辞大藏卿。
- (h) 八條隆英 延享五年五月二十四日辞権中納言。
- (h) の『百人一首』の書写の資料は別の折のものかも知れないが、『六百番歌合』についての触状を一連のものと考えれば、官職名から宝暦四年十月二十六日以降、宝暦七年十一月十

二日以前のものとなる。前掲の書状と考え合わせて、やはり宝暦五年もしくは六年の正月に出された触状であると言える。

さて、色紙奉行とはどのような役職と考えられることになるのか。上記の資料からは、『六百番歌合』や『百人一首』の公卿達による書写を差配している。但、「色紙奉行」と名付けられているからには、『六百番歌合』や『百人一首』といった冊子体の書物の書写よりも、歌仙色紙などの色紙の寄り合い書きを差配することが本来であったことが予想される。つまり、『六百番歌合』のような大部な書物も作成してはいるが、それは、書写して宮中で所蔵するためではなく、天皇や院からの下賜品として人に与えられるためのものであつたろう。下賜品とは、いわば、臣下や民に対して示される「慈悲深い叡慮」が、物（書）の形を取ったものであるとすれば、その「叡慮」の生産体制が、宮中の業務として組織的に制度化されていたことになろう。宸筆はもちろん、それでなくとも手ずから筆を執って書かれた書あるいは筆蹟というものは、「叡慮」を直接に感じさせるものとして珍重され文化的価値を持つ。それを効率的に利用する仕組みが、色紙奉行の差配による書写行為であると言えよう。

では、その営為は実際どのような手順で行われていたのか、上記の資料から具体的な流れを追ってみる。

宝暦五年あるいは六年の正月に『六百番歌合』の書写の必要が生じた。そこで色紙奉行が（おそらく議奏により）任命される。今回は久世栄通と植松賞雅の二名に、書写の差配が命じられた。『六百番歌合』は全二十卷なので、おそらく計二十人の公家選ばれ正月某日に（a）～（g）ほか計二十通の触状が出された。その内容は、来月の二月十八日までに所定の各冊を書写して献上するようというものである。触状とともに、書写する元本一冊と、

写すための料紙を三括りと、「堺」一枚が添えられた。「堺」とは野紙のことで、野の幅や高さなどの書式を一定にするための下敷きである。寄り合い書きの場合、各冊の体裁を揃える必要がある。ましてや『六百番歌合』の場合は冊数も多く、歌合であることで、歌題や右方左方、作者や判詞の書き始めの位置など指定する項目が多いので、なおさら必要である。色紙奉行の命を受け、これらの一式を調べ、実際に書写者のところに届けるのが、非蔵人の仕事である。内閣文庫所蔵の『御色紙奉行備忘』（写本一冊、和一七四五）は、色紙奉行側の書留で、文政から天保の記事が見られるものであるが、そこには、

一、尤於御色紙奉行書付候こと、何も無之。いづれも非蔵人筆也。

とあるので、あるいは触状も非蔵人の筆かもしれない。

書写を依頼されたうち、四条隆叙と高丘敬季が書写を終えて色紙奉行に届ける際に添えられた書状が（A）ならびに（B）である。日付はともに締め切りの十八日の前日の十七日である。（締め切りの前日に届けるということが恒例であるのか否かについては、もとよりこの二通だけでは判断ができないが、留意しておきたい。）

（C）は甘露寺規長が書写の書き損じを改め直して色紙奉行宛に献上している際の書状である。（D）は色紙奉行から書写依頼者の風早公雄宛に、書き改めたものの提出の催促をしている。それに対して（E）に於いて、風早公雄は「龜忽之至」と恐縮しつつ、もう一日の猶予を乞うている。以上から、書写された書に校閲が加えられ、書き直して再度献上するという過程が出来上がっているとわかる。事実、触状の（a）（c）（e）には、宛名と巻名の間に、それぞれ「校合了」「一校訖」「一校畢」と触状の筆蹟とは別筆で書き入れがなされている。（C）（D）（E）の書状の日付は何れも二月十九日で、締め切りの僅か一日後である。おそらくは忽卒の間に校閲が行われたと思われるが、非蔵人が校閲に関わることがあり得たかどうかは不明である。ただ、これらの資料が非蔵人の家に伝わっ

ていることを思えば、少なくとも事務的处理のある程度の部分は非蔵人に委ねられていた可能性もあるように思われる。

以上、天皇や公家の筆蹟が尊重され、朝廷の文化的權威を広め高める仕組みとして機能していたであろう色紙奉行の営為の一端を、非蔵人の側の資料を以て紹介した。

注(b)の触状の上半分(二六丁紙背)には、宛先と書名の間に、藤島宗順と思われる筆蹟で、「明和五子九月廿九日／合、御、御／是 書／宗順」などと手習い書きが書き込まれている。触状が記されたのが仮に宝暦六年(一七五六)であるとすれば、十二年後の書き入れになる。紙背ではなく表面の二九丁表にも明和五年の歌の書き入れがあり、当年十三歳の藤島宗順が父親の詠草留を手にしていたことが窺える。自らの和歌の稽古のためであろうか。

二 俳諧歌仙

藤島宗韶の同じ詠草留(『藤島宗韶詠草』一五九九 大四三―一)の紙背文書のうち、二一丁、二二丁の紙背文書にあたる俳諧歌仙一卷を翻刻し紹介する(図版10・11)。

両丁はもと一枚の折紙であったものを、中央で水平に二分したものと見られる。二二丁が初折、二一丁が名残の折にあたる。本文は第二七句のみ欠落している。作者は「飲湖」「柱蚊」「李兄」「柳枝」とあるがいずれも不明で、書写者も不明である。ただし、他の紙背文書も宗韶の業務や文芸活動に関わる内容であることから、本歌仙の作者及び書写者も宗韶周辺の人物である可能性が高い。とすれば、非蔵人の人々による余技として、彼らの文芸生活の

一端を示す資料となろう。

内容は、端作に「恋尽」とある通り、恋の句で一貫している。例えば発句「破らるゝ夢の命の霰哉」は、夢の中の逢瀬が霰の音によって破られ、命が絶えるような辛さを感じたという句。脇句「忍びかねたる年内の梅」は、春を迎える前に咲く寒梅の姿に、恋心を「忍びかねたる」様子を託している。様々な恋の趣向が詠み込まれた歌仙となっている。

《翻刻》

歌仙恋尽

破らるゝ夢の命の霰哉

飲湖

忍びかねたる年内の梅

柱蚊

倅は車の外に立そひて

李兄

あくびよごるに琴の爪音

柳枝

底までも心通した淵の月

蚊

振袖もあり萩のとも摺

兄

ウ

惚て居る身はうつむいて紅葉狩

兄

愛染そしる女房淋しき

柳

やみ上り貴布祢詣と成にけり

柳

嘶叫く雨の降出し

柳

螢火の思はぬ方に風情有り

湖

別る、時に郭公鳴

湖

ひいきめの相図せつなき胸の鞭

蚊

かわかぬ袖にすむはいざよい

兄

紅葉々の散敷あたりゑしやく有

柳

氣を知て是非預り度蘭

蚊

花やかな春を恥たる長門宮

蚊

ひな祭にもやつこ交る

兄

二ヲ

蜉蝣のもゆる姿やおもひ草

兄

灯白成て疑ふ

湖

丸鏡曇れば常に美人也

兄

情のこもるさゝがにの家

柳

実と虚真中を行飛鳥川

湖

間違直に縁と成鳧

湖

緋おどしの袖にくまる、今朝の雪

蚊

蘇鉄のやまはおはぐろの沙汰

蚊

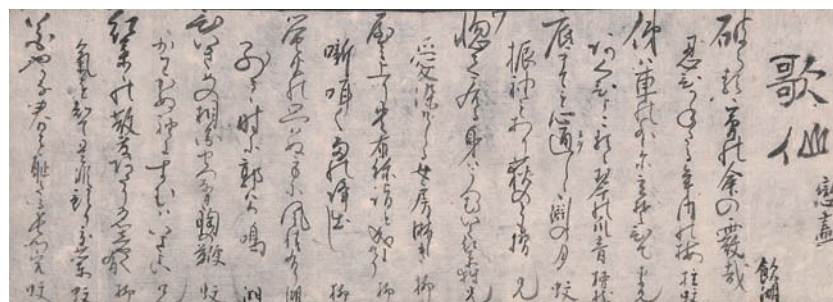


図10 俳諧歌仙一卷

(空白)

馬上の琵琶の涙恥かし

湖

いなしたる跡にて月に手を合せ

湖

せめて立名を戻せ秋風

蚊

(二)ウ

茸狩に仰媚心あり

柳

長刀さばき余程なる口

兄

揚屋入行儀乱る、柳かげ

柳

齒がたが付て天下太平

兄

そらだきの袂にもれむ花の宴

柳

結ばれ解て長き糸遊

蚊

〈キーワード〉

色紙奉行・俳諧・紙背・藤島宗韶・藤島宗順・非蔵人・新日吉

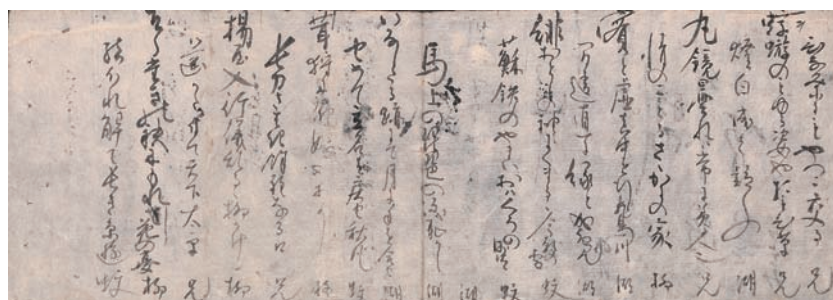


図11 俳諧歌仙一卷